

吉林省におけるソデグロヅルの渡り中継地の選択

および個体群動態の研究

王海濤¹・高瑋¹・于国海²・楊兵兵²

1 東北市販大学生命科学学院

2 莫莫格国家自然保護区

訳 福井和二

2003年9月から11月と2004年3月から5月に、我々は莫莫格保護区(45° 45' ~46° 10' N, 122° 27' ~124° 4' E)およびその周辺で、望遠鏡(20~50×)を用いて、ソデグロヅルの個体数調査を行ない；全日観察で、ソデグロヅルの採食、休息等の生息場所利用状況の調査を行った。用いた方法は、ソデグロヅルの中継地(休息地)での、それぞれでの行動要因の調査。GPSを用いて測定した各中継地(休息地)の面積と実地調査・資料調査を合わせ、水資源の変化を調査し、さらにGPSを用いてソデグロヅルに対する人の干渉と反応距離を測定した。2003年秋と2004年春のソデグロヅル個体数は365±10羽と1023±50羽であり、2004年春の個体数は今日までの最高で、成鳥に対する亜成鳥の比は25%であった。ソデグロヅルの生息地の利用状況は、採食地とねぐらが明確に分かれてはおらず、当地滞在時間は45~50日ほどである。春季の滞在後少数の亜成鳥が図牧吉自然保護区へ移り、夏を過ごす。2004年の夏は14羽が図牧吉で生息していた。

現在、ソデグロヅルの中継地はモザイク状に分裂しており、かつ、その面積も大量に失われている。原因は乾燥によるところが大きい。かつてあった15ヵ所の中継地のうち13ヵ所が完全に乾固してしまった。現在、中継地の多くが水田の取水、排水に利用されることにより、しばらくの間、湿地として維持されているが、特に春季は水量が減少する時期である。乾燥に至った原因は、上流に造られた3つのダム(宏勝ダム、図牧吉ダム、察尔森ダム)により水流が断たれたことと、1999~2002年の間、降水量が連続して少なく、地表水分の蒸発量が大きかったことである。

水資源の変化は、中継地の食物蓄積量に大きく影響し、毎年枯れることのない湿地は、食物量が豊富で、(エゾウキヤガラ *Scirpus planiculmis* の地下茎の量 186.6±21.3個/m²)、乾燥する湿地の食物蓄積量は少ない(75.2±7.8個/m²)。ソデグロヅルが中継地として選択、利用する水面は、水深が浅いところの面積と滞在する個体数とは正の相関があり、水面の面積が増大すれば、人やその他の動物との距離が長くなり、それらの干渉が軽減することにより、個体数が増える。ソデグロヅルが選択する採食場所の水深は、脚面から附蹠の関節に至る水深に主に集中し、そこに集まる個体数は70%を占める(n=12017羽)。中継地での主な行動は休息、採食で、植被のまばらなところ、あるいは草丈の低いところを選択している。主要食物はエゾウキヤガラの根茎で、動物性食物を利用しているところは見ることがない。ソデグロヅルの成鳥と亜成鳥は食物を掘り出す場所の水深が異なる。掘取る回数も成功率も明らかに異なり、水深が脚面から附蹠の1/2ほどまでが成功率が最も高く、成鳥で2.4±1.7回/min(n=72)、亜成鳥で1.8±1.2回/min(n=49)であった。滞在期間中親鳥が亜成鳥に対する給餌行動を見ることがある。

ソデグロヅルの群れの大小で警戒する距離は顕著な差はないが、警戒して飛び立つ距離は明らかに異なる。家族群の警戒飛び立ちの最大距離は280.1±56.9m, n=23。大群でいるときの警戒飛び立ち最短距離は219.3±30.4m, n=16であった。警戒対象物により警戒距離も飛び立ち

距離もそれぞれ異なり、車両に対する影響が最も大きく、警戒状態に入る距離の最大は $566.9 \pm 58.2\text{m}$, $n=17$ で、その飛び立ちは、人による干渉が最も大きく $329.3 \pm 52.9\text{m}$, $n=17$ であった。我々はこれにより、ソデグロヅルが警戒に入る距離と飛び立ちはじめる距離を推定し、ソデグロヅルの中継、滞在地の重要な最小面積をやっと推算することができた。

我々は、ソデグロヅルの中継地である湿地がモザイク状に分散している問題を速やかに解決し、2～3ヵ所の重要な中継地を重点的に回復させ、保護することを提案する。同時に中継地の開拓、放牧など人間活動を禁止し、ソデグロヅルの活動に大きな影響を与える中継地の植被を保護し、その面積を回復することが必要である。